

身体・感情・視線

——19世紀西洋における「ヒステリー」の文化について——

太田 省一

本稿は、19世紀西洋の言説空間に関してこれまであまり検討されることのなかったと思われる一つの側面に注目する。それは、脆弱な身体を台座として編成される言説の実定性、そしてそこに表現される独特な共同性の空間である。「ヒステリー」は、そのような言説編成のなかの重要な記号として存在していた。そこで以下では、まず小説などを例にして「ヒステリー」の独自の作用とともにあらわれる共同性の特徴を明らかにし、さらにその共同性が、「私」の空間を起点にして「公」の空間にも広がっていくものとして経験されていたことを「ヒステリー」と「群集」の言説編成における結びつきという点からみていく。要するに、「ヒステリー」を医学的な言説という文脈ではなく、それも含めた広義の文化の言説という文脈からみていくというのがここでの眼目である。

1. 序 論

(1) 「脆弱な身体」の“発見”

本稿は、「ヒステリー」を言説の水準において理解することを通じて19世紀西洋文化のある特質を浮かび上がらせようという一つの試みである。「ヒステリー」が19世紀西洋において独特の意味合いを帯びた病だったという事実はすでによく指摘されているところである。また医学の場だけではなく、小説のなかで「ヒステリー」が題材として取り上げられ、登場人物の性格にとって重要な位置を占めていたということも当時の作品をみればすぐに気がつくところだろう。そして確かにそれは、19世紀の西洋に特有な現象であるように思われる。例えば、18世紀に「ヒステリー」だけが特に取り上げられることはなかっただろうし⁽¹⁾、20世紀には「ヒステリー」は、文化のなかでの一般的な関心の

対象とはいえなくなるだろう。

では、19世紀西洋におけるこのような「ヒステリー」に対する関心の高さは何を物語っているのだろうか。実際、19世紀西洋の「ヒステリー」は、近年盛んな研究の対象になっている。例えば、「ヒステリー」が単純な意味で生理学的な原因からくるものではなく、特に女性の置かれた社会的位置づけに密接に関わっているものとするジェンダー論の立場から、フェミニズムは「ヒステリー」をテーマにした数多くの研究をすでに生み出している⁽²⁾。そこでは、19世紀西洋社会がつくりあげた「ヒステリー＝女性の病」という一見自明な等式の背後に潜む家父長制的な支配の様相が明らかにされる。

おそらく19世紀西洋がそのような権力関係を内在させていたことは確かだろう。だが、19世紀西洋において「ヒステリー」はそれとは違う意味合いを帯びたものでもあったように思われる。もちろん、ジェンダー論からの「ヒステリ

一」研究自体それほど単純な視角に終始しているわけではない。男女間の権力関係を一面的にとらえるのではなく、言説戦略という側面から女性の抵抗のエクリチュールについての研究が盛んに行われだしていることなどはその一つの証明である⁽³⁾。しかしながら、いずれにしてもそこでは権力関係の存在が前提されていることには変わりがないだろう。だがむしろわれわれがみていきたいのは、権力関係を前提にしないところで一定の役割を果たしていた「ヒステリー」の作用なのである。

その視角がどんなものかを表現するとすれば、それは、当事者の経験としての「ヒステリー」という側面に着目し、19世紀西洋におけるその経験の射程をとらえようとする立場だといえるかもしれない。ただしここで当事者の経験をみていくといったとき、それは医師—患者関係を固定化したうえで医師の認識によってはとらえきれない患者の感覚を明らかにするというようなことではなく、あくまで言説と身体が相関する水準における記号の経験として「ヒステリー」を位置づけようということである。すなわち、「ヒステリー」を権力関係のなかの賭金として扱うのではなく、言説のなかでの「ヒステリー」のさまざまな表現—もちろんそれは、直接目にする場合もあれば、物語や映像を通しての場合もあるだろう—に出会った者がそこに自らのなかの「ヒステリー」への傾向を感じとってしまうような関係性の場に照準するということなのである。そこに注目するとき、「ヒステリー」は、ジェンダーに直接関わることのない言説編成の特徴を物語る記号としてみえてくるだろう。

では、「ヒステリー」は19世紀西洋において具体的にどのような言説の厚みを積極的に指し示しているのだろうか。われわれはそれを、脆

弱な身体を実定性の台座にもつ言説であると考ええる。言い換えれば、「ヒステリー」が19世紀西洋文化のなかの特権的な記号の一つでありうるのは、そこで個の身体が脆弱なものとして“発見”されているからこそである。ここで“脆弱性”とは、身体がただ翻弄される無力なものだということではない。それは身体がさまざまな力の媒体になりうるという歴史的様態の成立を示すのである。そしてそこで「ヒステリー」的の身体は、感情の力を媒介する脆弱な身体として存在している。ただし、身体が感情を媒介するというかたちそれ自体は19世紀だけのものではない。例えば、18世紀の社交の空間においては共感の原則に基づいてさまざまな身体記号のかたちをとった感情の交換が行われていただろう。だがわれわれが身体と感情の関係において注目したいのは、感情の表現形式として身体があるという位相よりはむしろ、身体が記号として強く意識される結果、そこに感情の発露が読み込まれてしまうという位相のほうである。その点、19世紀西洋が特異なのは、身体にとどまる感情を再認することで、感情の力をことさら増幅させようとする視線がそこに成立しているという点にある。従って、そのような身体と視線の連関においては、感情は個の身体に帰属すると同時に過剰なものとして、例えば情動 *emotion* というかたちで限界からはみ出すことになる。そのときそのように個の身体から外化する感情は、視線にとって隠されていた感情の表現としてうつるだろう。だが、そのような表現は、再認する視線による感情の増幅の帰結なのである。その限りにおいて、「ヒステリー」的の身体が感情の媒体であるということと感情の表現であるということは、同時的なものなのである。

(2)「伝染」の共同性

このように感情の媒体＝表現として「ヒステリー」的身体を考えると、われわれが「ヒステリー」という言い方で指しているのは、19世紀西洋におけるヒステリーのなかのある側面だといってよいかもしれない。例えば、19世紀の医学的治療の場面においてヒステリーは、感情の媒体ということから連想されるのとは逆に、むしろ感情の激しい噴出－ヒステリーの典型的症状とされる言語障害、身体のけいれんなどが示すもの－によって伝達不能性を体現するもの、言い換えれば言語による分節化の不可能なものとして多くの場合認知されていただろう。だがむしろわれわれが目したいのは、そのようなヒステリーとは別に、感情の伝達の媒介となって個体間の関係性の基盤となっていた「ヒステリー」のかたちなのである。

では、そのような「ヒステリー」的身体が起点となって形成される関係性とはどのようなものだろうか。

感情の媒体＝表現として身体が位置づけられるとき、そのような身体間においてある共同性が成立することになる。それは、一見奇妙に思われるかもしれないが、想像的に逸脱を模倣しあうことで形成される共同性である。19世紀西洋に固有なこのような共同性をそこでは逸脱が伝播し再生産されるという意味で「伝染」の共同性と呼ぶことにしよう⁽⁴⁾。では、なぜ19世紀西洋の言説空間においてそのような共同性が成り立つのか。そしてそこではどのような記号の経験が起こっているのだろうか。おそらくそこには、身体が感情との関わりでどのようなものとして規定されているか、そしてその身体に向けられる視線はどのような性質のものとして成立しているかという前節でもふれたことが関わってくるだろう。

身体が感情の媒体であると同時にその表現にもなるという二重性は、身体の有限性、すなわち身体が内部を備えているものとして“発見”されたということと密接に関わっている。そしてそのような個の身体の成立は、身体をそういうものとして読み込む視線と相関している。その際、内部に封じ込められた感情は、常にすでに露見してしまうものとして視線の対象になる。言い換えれば、感情は視線によって暴かれるために内部にまず隠されるのである。19世紀西洋の自他関係は、そのような個の有限な身体を感情の交換の回路に組み込んだかたちで成立している。感情は各自の内部に秘められて見えないものとされる。だが前節でも述べたように、身体の中の感情は、視線の増幅作用によって外側に自ずから露呈してしまうものとしてある。そこで外化した感情は、個別的なものではないという意味で逸脱なのだが、その意味で言えば、逸脱的表現こそが関係性の前提でもある。つまり、個の身体における感情の漏出は、自他関係の“常態”を構成する逸脱なのである。

従って、そこでの身体への視線は規律化の文脈とは異なる特性を帯びている。感情の逸脱に対する視線は、そのような身体の表現を医学的な解釈図式に回収しようとしたり、それを身体の内部に再び封じ込めようとするのではなく、むしろそのような感情の逸脱に自らを同調させようとする。逆に言えば、身体に封じ込められていた感情、すなわち情動は、外化した瞬間に身体を媒体として他者に影響を及ぼすものになる。結局、感情の媒体である身体は、視線によって表現として切り取られるが、逆にそのことによって他者の身体に媒介された感情は、視線の主体の身体に作用し、感情の逸脱を模倣させてしまうのである⁽⁵⁾。このように、身体を媒

介にして感情の逸脱を共有することによって成り立っている自他関係のことを「伝染」の共同性というふうと呼ぼう。19世紀西洋は、そのような感情の関係性に基づいた共同性の保持にとらわれていたようにみえる点で、独特の感受性の論理に依拠した時代だったように思われる。

(3) 「私」の空間と「ヒステリー」

この「伝染」の共同性が発生する場所は、無限定に広がっていたわけではない。それは、19世紀西洋においては「私 private」の領域の内部にまず位置づけられるものである。感情の逸脱の記号として「ヒステリー」的身体が関心の対象になったということには、19世紀において「私」の空間が独特な領域としてあらわれたことが深く関わっている。ただしここでいっている「私」とは、概念的な図式のなかでとらえられるようなものではなく言説の実定性の水準で表現される空間としてのそれである。その水準では、「私」は安定した空間ではなくむしろ根本的に不安定なものとしてある。その不安定さは、すでに述べたような感情の媒体としての身体の脆弱性からくるものである。そのような身体を起点に展開される言説のダイナミズムは、19世紀の言説空間における「私」を問題化するだろう。19世紀の「私」の空間に関しては、隠されておくべき感情的関係の私秘性がもう一方では暴露されてしまうというところに言説のリアリティーをみてとることができる。そしてわれわれは、ある意味では“常態”と化しているこの「私」の問題性の実質を、身体の脆弱性がいやおうなく実現させてしまう「伝染」の共同性にあると考えてみるができるだろう。言い換えれば、自己の個別性を強く感じとることがそのままある種の関係性を招来することになるような身体が「私」の空間において成立して

いるのである。そのとき、「ヒステリー」は、「私」の問題性を体現する記号になるだろう。

そのような布置を支える言説として小説は、19世紀西洋文化のなかでひととき大きな役割を果たしたように思われる。特に1860年代に流行したセンセーション小説は、われわれがここで明らかにしようとしている19世紀の特質を考えていくうえで格好の事例である。例えば、センセーション小説の古典ともいえるW. コリンズの『白衣の女』では、「伝染」の不安を象徴する場面が冒頭にでてくる。男性主人公がさびしい夜道を一人で歩いていると、背後から一人の女性に肩を触れられる。そのときその男性主人公は、「(…) 体の中のすべての血が一瞬のうちに凍った」(Collins [1860=1978:25]) 状態になる。女性は、神経質そうなようすを示しているが、結局精神病院から逃げだしたことがわかる。この場面は、小説の物語の展開を決定づけるといってもよいほど重要なものだが、ここでまず象徴的に語られているのは、「女性性」は接触することで「伝染」するものだというのである。そしてそのような「女性性」の接触は、男性にとって必ずしも排除されるべきものではない(6)。もちろんそこには男性が女性化することへの恐怖感も存在しているだろう。だがもう一方でこの小説の全体的気分は、「女性性」というかたちで示されるような個の特異性への共感である。実際、触れられた男性主人公は、そのことによって「女性性」に対して身を固めて拒もうとしつつも結局それに感染してしまうのである。そしてそれは、瓜二つの女性と恋愛に陥るといふ後の主人公の運命を方向付けているというところからみると、そこには男性主人公の快楽の原型があるといっても過言ではないだろう。いずれにしてもそこには敏感な身体を媒介にした「伝染」の共同性が形成されているの

である。

そしてもう一つセンセーション小説に関して重要なことは、そのような「伝染」の共同性が読者の身体をも巻き込むものになっているということである。D. A. ミラーの表現を借りれば、センセーション小説とは、「なによりまず共感の神経系に働きかける近代文学における最初の例の一つ」(Miller [1988=1996:146=187])である。言い換えれば、読者の身体に直接訴えてくる点にその特徴がある(7)。そこでは、物語の外部にある視線の主体である読者が、自らの敏感な身体を発見し、「伝染」の共同性に同調するのである。

結局、ここには、「私」の空間が常にすでに暴露される私秘性として存立しているという事実が身体の前景化を通じて示されている。しかもそれは、物語の内部で描かれる「私」の空間にとどまらず、その外側の読者がいる「私」の空間にも関わる事実としてある。あるいはむしろ、読者の同調的視線があつて初めて「伝染」の共同性は保持されるといったほうがよいのかもしれない。その側から言えば、19世紀西洋とは、視線の対象に触れようというある種の欲望がさまざまなかたちで露呈した時代でもある。この「距離をおいた接触」への欲望についてはまた後でふれるが、いずれにせよ「伝染」の共同性は、いろいろなかたちで身体を巻き込んでいく磁場なのである。そして「ヒステリー」的身体を通じてみると、19世紀は、そのような共同性が「私」と「公」の分節を不安定にさせながら拡大していった時代であるように思われる。

ただし、身体の前景化は、分節を完全に破壊するまですすんでいったわけではない。むしろ逆に、「私」と「公」という分節は根本的に不安定な状態におかれることによって「伝染」の

共同性に何らかの方向付けを与えたのである。「私」と「公」の分節という側からみると、「伝染」の共同性は、無限定かつ無抵抗に拡大していくものではない。ある意味でそれは、助長されながらも束縛されることを必要とするのである。そこで本稿では、「ヒステリー」という記号を手がかりにしながら「伝染」の共同性の二つの展開のかたちをみていきたい。19世紀西洋において「ヒステリー」的身体が織りなす関係性には、基本的に二つの方向があるように思われる。それは、「伝染」の共同性が「私」の空間の内部に閉じていくことで強度を高めていく場合と、逆に「伝染」の共同性が「私」から「公」へと境界を越えて広がっていくことで、「ヒステリー」の記号が言説空間に拡散していく場合である。この二つのかたちは、逆の方向性をもつが、脆弱な身体を言説の実定性の台座とする点では共通しているのである。以下では、それぞれの場合について順におってみよう。

2. ヒステリー化する「母親」

(1) 「母親」の非生殖的身体

まず、この章では、「私」の言説空間の内部での「ヒステリー」をきっかけとする「伝染」の共同性の発現の様態についてみていこう。それは、言説のなかで「家族」がどのようなものとして表現されていたかということ、そして「ヒステリー」が女性性との関わりでどう位置づけられていたかということに関わってくるだろう。

M. フーコーは、周知のように『知への意志』のなかで18世紀以来発展してきた知と権力の複合の四つの戦略のうちの一つとして「女性の身体ヒステリー化」を挙げている。フーコーは、

「《母》というものが、その否定的=陰画的イメージとしての「神経質な女」と共に、このヒステリー化の最も目に見える形を構成する」(Foucault [1976=1986:134])と指摘する。ここで言われている「母親」と「神経質な女」とのつながりのは、われわれの議論にとっても重要である。ただし、そのつながりは、少なくとも単純なポジとネガの関係ではない。フーコーとわれわれの違いは、母親の身体のとらえかたにある。フーコーが、権力分析の立場から母親を生殖=再生産を担う身体と考えるのに対し、われわれは、「母親」の身体を「神経質な女」あるいは「ヒステリーの女性」とつながる感情の媒体=表現と考えるからである。つまり「母親」は、感情を媒介すると同時に独特の感情表現を示すものとしてまず存在する。そこでは、「ヒステリーの女性」が言説編成の積極的な起点となるのであり、非生殖的な身体としての感受性豊かな「母親」は、その延長線上に成立する形象である。脆弱な身体を実定性の台座とした言説においては、「母親」と「ヒステリーの女性」の間には感情の論理に基づいた連続性が認められるだろう。

ただしそれは、「母親」がそのまま「ヒステリーの女性」であるということではない。もちろん、「母親」は、本質的に「ヒステリー」への傾向を内にはらんでいる。だがその前提にあるのは「母親」の感受性の鋭さであって、そこには、自ら「ヒステリー」になりやすい傾向と、「ヒステリー」を普通以上に察知した理解できるという解読者の資質とが共存しているのである。つまり「母親」は、根本的に両義的な存在として19世紀には存在している(8)。そのことが、「私」の空間における「伝染」の共同性の様態をまず規定するのである。そしてそのとき、「家族」も、生殖=再生産の場というより

は、脆弱な個の身体どうしが感情を交換する場としてまず性格づけられることになる。そして「家族」は、個体間の一次的な関係性の場、私秘性の場であるというまさにそのことによって、逸脱の共同性の典型となる。そこでは、ジェンダー的な区分にもとづく性別はそれほど重要ではない。男性であれ女性であれ、鋭い感受性を備えているかどうかはまず問題なのである。そのようなジェンダーの区分に基づく関係性としての〈家族〉は、むしろ生殖=再生産の遂行という点からみれば常にすでに危機状況にあるものとして表象されるだろう(9)。だが、記号としての「ヒステリー」を実定性の台座とする言説空間においては、「家族」は危機をまさに“常態”としているのである。そこで「母親」は、逸脱の「伝染」による共同性の形成にあたってきわめて実質的な役割を与えられている。

(2)看護の逆説

そのような「母親」の役割がよくわかる一つの例は、看護の場面にあるだろう。実際、19世紀の小説において病人の看護の場面、しかもそこで女性、典型的には「母親」が男性医師に優る力を発揮する場面は数多くみられる。そこには“政治的”な意義が見出されることもある。例えば、女性が病気にかかるということは、型にはまった社会的役割から逃れ自由になることであり、その際看護にあたる女性は改めて病人である女性に生命力を与える存在である。また、病気になった男性を女性が看護するということは、女性が男性に対して主導権を握るほとんど唯一の機会でもある(10)。

しかし、看護の場面にみられる関係性にはそのような政治的な構図に還元できない側面も存在する。それは、19世紀の看護の関係には根本

的な部分である逆説がはらまれているからである。

「母親」が看護の場面で最も力を発揮するのは、医師の臨床的視線が無力になってしまうような病気に病人がかかっているときである。「ヒステリー」は、そのような病気を代表するものである。なぜなら、そこには身体が偽るものであるということがはっきりあらわれるからである。個の身体が内部を備えたものになるということに伴い、内部と外形との不一致の可能性が生じてしまう。つまり、外部に表明された症状の原因を身体内部に特定することが非常に困難になる場合が起こってくる。特に外化するものが「ヒステリー」のような感情の逸脱であるときには、困難はさらにその度を増すだろう。さらに、表明された感情が操作された偽りのものであるという可能性を症状の解読者は常に考慮のうちに入れておかなければならない。結局、「ヒステリー」のようなとらえどころのない病気に対する解読者としてふさわしいのは、医師よりは同じ女性であり、「家族」における感情の関係性の中心である「母親」ということになるだろう。

ところがそこにはある逆説が認められる。それは、「ヒステリー」の最も良き解読者は、鋭敏な感受性を最も純粋に体現しているがゆえに最も「ヒステリー」にかかりやすいという逆説である。その意味で看護の主体である「母親」は、その才能に長けていればいるほど典型的な「ヒステリー」患者になりうるのである。

センセーション小説のなかには、そのような両義的存在としての「母親」が主人公としてしばしば描かれる。ウッドやコリンズの小説のなかには、病人である子供に対する過剰な共感によって、看護する主体としての自らの地位を危うくしてしまう母親や、さらには情動の力によ

って自ら逸脱し、さらにそのことによって看病している娘をヒステリーに追いやってしまう母親が登場する (Vrettos [1995:44-47])。

このような「ヒステリーの母性 hysterical maternity」の形象は、前節でも述べた19世紀の言説空間における「母親」と「ヒステリー」の結びつきの特徴を物語っているように思う。「母親」は「ヒステリー」と質的に異なるのではなくある種の連続性のもとで逆説的に結びつく。つまり、脆弱な身体を実定性の台座とする言説が描き出す空間のなかで、「母親」は、自らの内なる情動の論理に忠実であればあるほど自らの情動の強度に感染してしまう。そしてそれは、感情の媒体としての身体が最も発揮されるときでもあり、「母親」の身体は、外化された感情の表現によって他者の身体をそのような力の場に巻き込んでしまうのである。

おそらく極端な場合には、看護にみられるような「伝染」の共同性は内閉し、逸脱の度合いが限界を越えることで自壊すらしてしまうだろう。つまり、身体の内側に感情の力を封じ込めることで、その力が外化したときの身体記号の強度を高めるということが過剰に行われたとき、単なる逸脱の域を越えて、「伝染」の共同性から切り離され孤立する身体が生み出される。この文脈において抑圧の機制が果たす役割は重要なものに思われる。われわれが強調する「伝染」の共同性にとっての抑圧の機制の存在意義は、感情の封じ込めへの強迫によってかえってそれが失敗に終わったときの感情の噴出を強調するという効果にある。言い換えれば、「ヒステリー」のような逸脱は、自他関係を維持できる程度のものであり、さらに言えばそのために必要なものすらある。だが抑圧の機制をそのような自他関係に接合することは、「伝染」の共同性の根本的な不安定さをさらに助長

することでもあり、そこには自らの基盤そのものを危うくするような逸脱した身体が生まれる可能性が内包されている。つまり、「ヒステリー」という共有可能な逸脱ではなく共約不可能な逸脱、例えば狂人という身体形象を招き寄せられる場合もあるのである。要するに、抑圧の機制によって内閉の度合いを高められた「伝染」の共同性は自らの限界に近づくことになるのである。

そのような例は、『白衣の女』と並んでセンセーション小説の代表的作品とされるブラッドンの『オードリー夫人の秘密』にみることができるだろう。そこでは、さまざまな犯罪を犯した女性主人公が、家の不名誉が公にならないようにするために外国の狂人保護施設に送られることになる。その措置の最終判断を下すのは男性医師である。ただし、その医師自らが言うように、彼女そのものは狂ってはいない。それは、一度もあらわれることはないかもしれないくらいの狂気である。しかし彼女は危険であるがゆえに監禁されなければならないのである。ここにはもちろん19世紀において女性がさらされていた抑圧のかたち、つまり女性の排除につながる権力関係を見て取ることもできるだろう (Miller [1988=1996:210-216])。だがこのブラッドンの小説が、ただ単に権力関係のメカニズムを描こうとしたものではない点に注意しておかなければならない。男性登場人物がコリンズなどの小説の影響から幻想に悩まされる場面が示唆するように、そのような女性の排除にいたる経緯の背景にあるのは読者身体をも巻き込むような「伝染」の共同性そのものの強度だともいえるのである (11)。

またそこで別の意味で注目できるのは、女性主人公が母親から遺伝性の疾患を受け継いでいるということがその存在の危険性の原因として

持ち出されることである。「彼女は狂ってはいません。しかし彼女の血のなかには遺伝性の病毒があるのです。」(Braddon [1863:249]) そこから示唆されるのは、「母親」の及ぼす「伝染」の力には二つのかたちがあるということである。一つには、ここまでみてきたように「母親」であることによって周囲の他者に及ぼす情動の影響力がある。それはいわば現在における身体力である。だがもう一つには、「母親」の身体は、不在の状態にあっても影響する力を備えているということがある。それは、19世紀の言説においてはしばしば遺伝病というかたちで表現される。しかしながら、ここで言及されている遺伝のかたちは、現代的な見方で想像されるようなものとは異なる19世紀西洋という時代に特有なものである。それは、具体的には「退廃 degeneration」という名で呼ばれていた。もともとそれは、19世紀の半ばフランスの精神科医 B. A. モレルが精神疾患の家系的遺伝を記述するのに用いた概念だった。モレルは、第一世代に発現した病は世代を経る毎に悪化し、最終的にはその家系を絶やしてしまうことになる考えた (12)。そこで遺伝されるのは、特定の病ではなく、いわば病そのものへの傾向である。言うまでもなくそれは、メンデル以降の現代遺伝学とは質的に異なる考え方である。従って、それを科学的正確さという基準に照らして一種の疑似科学とみなしてしまうことはたやすい。だがここで考えてみたいのは、この「退廃」というものへの関心が、もっと広く文化という文脈での逸脱した身体形象への一般的関心と重なるものだったのではないかということである。

「退廃」は概念的にとらえる限り、進化論という枠組みのなかで否定的に位置づけられるものだろう。しかしながら、19世紀西洋の文化的言説という文脈においては、言説生産の積極的

起点としてある。そこでは、「退廃」した身体という逸脱の形象が個別性においてまず正常なものに先立つ現実として存在している。そして「ヒステリー」の場合とはやや異なるかたちではあるが、やはりそこに「伝染」の共同性が想像されているといえるだろう。個の内部にあると想定される遺伝的素質は、身体を表層にあらわれて初めて形象化するものであり、それ自身はとらえどころのないものである。アルコール中毒の父親からヒステリーの娘が生まれるのも「退廃」のかたちであり、同じ病気が世代間で繰り返されるということではない。敢えて言えば、自らの内部に潜む衝動や欲望を抑えきれないという個人の性向こそが「退廃」の本質なのである。そういった点からみれば、「退廃」という記号で喚起されるイメージとはまさに「伝染」の共同性である。

結局、「私」の空間のなかの「母親」という身体形象において、「ヒステリー」と「退廃」とが「伝染」の共同性を支える記号として共存しているということがいえるだろう。けれども『オードリー夫人の秘密』などでは、「退廃」は「ヒステリー」と直接結合することはなく、女性を「私」の空間に封じ込める重石のような位置にあった。ところがもう一方で、「退廃」の身体は、「私」を越えて「公」の領域でのさまざまな逸脱的身体の名称として用いられるようになる。19世紀の後半、「退廃」の身体は、精神医学という枠をはるかに越えて、重要な形象としてさまざまな言説に拡散していく。そしてそのなかで、さまざまなかたちで「退廃」と「ヒステリー」は結びつくことになるのである。いわばそれは、19世紀後半の西洋において、脆弱な身体のもつ「伝染」の力を複合的に表現する言説編成が「公」の空間に向かって拡がりながら分散していくかたちで形成されつつあった

ということのように思われる。脆弱な身体を実定性の台座とする言説が「私」と「公」の分節に全体的に関わるものになるとき、「退廃」と「ヒステリー」の結びつきはいくつかのかたちをとることになるだろう。ただ「ヒステリー」的身体という側からみれば、女性身体が媒体＝表現となる場合とより一般化したかたちで身体が媒体＝表現となる場合の二つのかたちが基本的に考えられるように思われる。次の章では、そのことについてもう少し具体的にみていこう。

3. 「ヒステリー」の希薄化

(1) 「女性性」の「伝染」

19世紀西洋においては、「女性性」を記述する言説として生理学的・生物学的言説が大きな意味合いをもっていたことは周知の通りである。その言説は、さまざまなかたちで作用しただろう。だがなかでもここで考えてみたいのは、生理学的・生物学的言説が女性身体への想像力を刺激する言説として果たした役割である。その文脈において、その言説は、「伝染」の共同性と密接に関わるものとしてみえてくるだろう。

「ヒステリー」の身体は、「私」の空間の外部と関連づけられるとき、「女性性」を担う他の身体形象と独特の関係をつくりだす。その代表的な事例としてここでは、「ヒステリー」の身体と「娼婦」の身体との結びつきを取り上げよう⁽¹³⁾。

この二つの身体は、ある意味では表裏の関係にある。「ヒステリー」の女性も「娼婦」も自らの情動をあらわにすると考えられている点では共通する。だが、前者は、それを自らの内部

に封じ込める力をはらんでいるのに対し、後者は、そのような抑制は弱いようにみえる。それは、「私」の空間内部に起点をもつ「ヒステリー」の身体とその外部におかれている「娼婦」の身体の違いと言えるかもしれない。従って、「ヒステリー」の身体が「私」の空間の内部で関係性の危機を招く存在だとすれば、「娼婦」の身体は、「私」と「公」を始めとしたさまざまな区分の境界の根本的な不安定さをあらわにする存在なのである。そして「ヒステリー」の身体と「娼婦」の身体が一つの女性身体において結合するとき、「私」と「公」の分節の不安定さは、限界までおしすすめられることにもなるだろう。

そのような女性身体の記述は19世紀を通じてさまざまなかたちでみえるが、なかでもその力能が集約的に表現されているのはおそらくゾラの『ナナ』だろう。ナナは、一方では男勝りの、自分の欲望に忠実ないわば男性化した女性であり、その振る舞いによって「私」と「公」、あるいは「男性」と「女性」の区分を攪乱する存在である。だが他方でわれわれにとってより重要なのは、ナナの身体が、「ヒステリー」の身体であることによって、逸脱の「伝染」を波及させる媒体にもなっているということである。

その場合のナナの身体の力は、生物学的想像力から得られるものである。「退廃」の血をもつ一つの家系の物語として構想されたルゴン・マッカール叢書のなかの一作品である『ナナ』の主人公ナナは、ゾラ自身によっても「アルコール中毒の親からうまれたヒステリー症者」と呼ばれているが、ナナの示す行動は、当時の医学においてヒステリーの症状とされるものに合致している⁽¹⁴⁾。だが『ナナ』が興味深いのは、その「ヒステリー」の身体が、「退廃」という生物学的想像力と結合することで、「私」を越

えた空間に逸脱の「伝染」を引き起こすものになっているということである。ナナが自分の身体を欲望の媒体と化すことで周囲にまき散らす“病原菌”は、性別、世代、階級の壁を簡単に越えて彼女の身体に接触した者に伝播していく。

もちろんそれは、ただナナの身体のみが腐敗の種を宿しているということではなく、周囲のさまざまな身体がナナに触れることで自らの「退廃」をさらに加速させるということである。従って、ナナの身体の伝染力は、作品中のどの登場人物も例外にはしないほど徹底したものになる。その「伝染」の共同性は、作者＝科学者の医学的・遺伝学的視線によってかろうじて支えられている。だがその視線の主体も、ゾラ自らが叢書の最後の作品『医師パスカル』で示したように、身体の伝染力に屈する存在なのである。そこには、生理学的・生物学的身体とそれに向けられる視線という基本の枠組みさえも安定したものではないということが明らかになっている。そしてそのときさらに、生理学的・生物学的言説と接合されることで「女性性」に結びついていた脆弱な身体としての「ヒステリー」は、こう言ってよければより“中性的”な力の媒体＝表現としての作用をあらわにしはじめるのである。それは、生理学的・生物学的身体という言説の台座から遊離して、表象としてふるまう演劇的な身体が強調されることだといってよいかもしれない。バーンハイマーの表現を借りれば、「欲望の「自然の」参照項である解剖学的身体の崩壊をナナの身体のヒステリー化の中に読み取ることができる」(Bernheimer [1989: 226]) のであり、そのようなヒステリー化の起点は、「表象そのものの沸き立ち」(ibid [1989: 227]) にあるのである。

ところで、『ナナ』のなかで生理学的・生物

学的身体が最終的な崩壊のかたちをあらわすのは、有名な最後の場面である。ナナの身体は、最後には天然痘という伝染病によって、まさに腐敗した変わり果てた姿になる。そしてそこには開け放たれた窓から戸外の群集の叫び声が聞こえてくる。このナナの「退廃」の極点ともいうべき崩壊した身体と群集との交錯は、ある意味では生理学的・生物学的身体から「ヒステリー」的身体が解離するとともに「娼婦」の身体に代わって前景化してくる身体形象を暗示しているように思われる。では、「群集」というこの身体形象は、19世紀西洋においてどのようなものとして経験されていたのだろうか。

(2)「群集」への視線

19世紀は、女性の想像力の強さからくる問題がしばしば指摘された時代でもある。小説を読んだり演劇を観たりする習慣は、女性特有の感受性に影響を及ぼす。小説や劇作品から受ける想像力への刺激を女性は好んで求めるが、それは女性の敏感な神経に障り、身体的な病的症状の原因にすらなるという医学的議論が19世紀には繰り返し起こる。こうした議論自体は18世紀からみられるものであり、目新しいものではない (Mullan [1988], Foucault [1961→1972=1975])。しかし重要な違いは、19世紀のそれが「伝染」現象として把握されていたということである。

1881年モスクワでの『椿姫』の公演中に、演者である女優サラ・ベルナルと観客のあいだにある出来事が起こった。劇中の人物が結核で咳込みながら死んでいく場面で突然客席のなかに熱病のように咳が起こり瞬く間に劇場を覆いつくした。そして数分間舞台の台詞も聞き取れないほどになったのである。そこには女優が病の症状を演技として模倣し、また観客がそれを模倣するという逸脱の「伝染」現象が発生して

いる。つまり演者側と観客側という境界をいとも簡単に越えて「伝染」の共同体が形成されたのである。このような現象に対してはすでに、「ヒステリー」にみられる無意志的な模倣行為との連想から「神経症的模倣 *neuromimesis*」という呼び方が存在していた。だがそれはやがて、単なる詐病だけでなく、病気について読んだり観たり聞いたりすることが同様の症状を引き起こしてしまうような暗示作用を特に指すものとして用いられるようになっていく (Vrettos [1995: 81-83])。

ここには、「女性性」とのつながりは幾分残しながらも「ヒステリー」的身体がより一般化した媒体=表現として存在し始める分岐点があるように思われる。同様の事例としてわれわれはすでに、センセーション小説における物語と読者の関係にふれておいた。そのような観客や読者の身体をも巻き込む「伝染」の共同性は、「女性性」からは離れ、いわば精神の感染の様相を帯びる。生理学的・生物学的言説とのつながりを弱め、一般化した身体として抽象の度合いを高めて希薄になればなるほど一言い換えれば「私」の空間を越えていけばいくほど、「ヒステリー」の身体は身体の脆弱性を表現する他の身体形象と結びつきやすくなるだろう。

19世紀におけるそのような身体形象の一つとしてわれわれは「群集」を挙げることができる。実際、上に挙げたモスクワ公演中の出来事をG.タルドは『世論と群集』に収められた論文のなかで観客群集の事例として取り上げている (Tarde [1901=1964:198])。言うまでもなく19世紀末の群集心理学の言説には、そのような暗示あるいは模倣による自覚されない集団的行動の例が数多く出てくる⁽¹⁵⁾。犯罪人類学などとならんで19世紀末に出現しまもなく衰微していっ

た疑似科学の一つとして位置づけられることの多い群集心理学だが、それを19世紀西洋における脆弱な身体を実定性の台座とする言説の一つの到達点としてとらえてみるならば、そこに19世紀の言説における現実の一端をかいま見ることができるだろう。従来、その言説の意味合いをブルジョア階級の支配の正当化の手段ととらえ、そこに民衆の抵抗を恐れる当時のブルジョア階級の心理的不安が反映されているという見方がしばしばされてきている。だが、「神経症的模倣」の例でもわかるように、暗示などによる「伝染」の共同性の影響力に外部は存在しないのである。それは、逸脱した対象に向けられる視線の主体をも巻き込む磁場である。従って、われわれが「群集」という集合的体への関心のなかにみたいのは、言説に外から投影される心理的不安ではなく、脆弱な身体を実定性の台座とする言説が本質的に抱え込む言説そのものの不安である。そして特に「群集」は、個の身体が集合体となったときに生じる逸脱的な変化として視線の対象になっているという意味で、19世紀西洋において、最終的に「社会」という記号がどのように経験されていたかを探る一つの手がかりになるように思われる。

一方で、「群集」をめぐる言説では、群集と女性の類似がしばしば指摘される。「(…) 群集は、その旧習を墨守しながらもしめす移り気のほか、反抗につながる柔順さ、その軽信、神経錯乱、憤怒から吹き出し笑いへと突然に飛び移る心の風向きなどによって、まさに女性である。」(Tarde [1901=1964:196-197]) このような衝動的で興奮しやすい性質が群集という身体集合に共通する特徴として認められるのは、個々の身体が暗示を受けやすい状態になっており、そのことによって精神的感染が容易に起こるからである (Le Bon [1895=1993:32-35])。

このことは、群集を催眠術にかかった人間と類比することによって強調されるところでもある (Le Bon [1895=1993:34]など) (16)。ル・ボンは、シャルコーによる有名なヒステリー患者の公開臨床講義に参加していた。そこでは女性のヒステリー患者に症状を自由に発現させるために催眠術が用いられていた。もう一方で、シャルコーは、サルペトリエールにいた女性患者の写真を撮り、「図像集」としてまとめたことでも有名である。そうしたことについてはすでにデイディー-ユベルマンが周到な分析をおこなっているが、われわれがここで注目したいのは、催眠術にせよ写真にせよそこには「接触への情熱」(デイディー-ユベルマン) にかかられている視線の主体がいたということである。シャルコーにおいては、距離を介した操作あるいは測定を距離を介した接触へと転化させていく視線の欲望をうかがうことができる。そこでは、ヒステリー患者の感受性の鋭敏さを可視化するために行われた五感や運動の測定の情熱が催眠術の採用につながっていく (17)。それは、ある意味で「神経症的模倣」の場合の観客と同様の視線、対象に同調しその逸脱を模倣しようとする視線の一つのかたちであるようにみえる。

そして視線の欲望のあらわれということにさらに広く目を向けるとき、「ヒステリー」と「群集」との結びつきが単なる権力関係の問題とは違うところにもあるということがみえてくる。「ヒステリー」の関係性と「群集」の関係性は支配-被支配の関係において重なるだけではない。むしろそれらは、それぞれのかたちをとってではあるが、「伝染」の共同性の磁場の強さを証明するものである。つまり、「群集」にしても「ヒステリー」にしてもそこに権力関係がからむことが不可欠であるというよりは、接触することの快楽が対象との距離を迂回路的

に置くことで強められているのである (18)。

ただし「群集」の場合には、「伝染」の共同性が多様化し、社会空間全体に分散したものになっている。従って、「群集」は、19世紀西洋における脆弱な身体の特質をジェンダーから離れた“中性的”なかたち、ある意味ではそれを希薄化したかたちで表現した身体形象であるともいえるだろう。そのことは、「群集」と「退廃」との結びつきに示されている。先にも述べたように、19世紀の後半、「退廃」は、精神医学の枠を越えて、さまざまな言説のなかで重要な位置を占めるようになる。そのなかで群集心理学あるいは「群集」をめぐる言説は、「退廃」の身体が「私」から「公」へと噴出し散布されていくときの鍵となる役割を果たした。モレルにおいてある家系に限定されていた遺伝的な逸脱の再生産というモチーフがル・ボンでは「群集」という集合的身体へと投影される (Pick [1988:95]、Rose [1985:60])。その際、歴史という時間性が持ち込まれ、個体から集合的身体への移行の延長線上にはさらに「民族」をめぐる言説が生み出されるだろう。もちろん、そのような言説は政治性を帯びたものとして権力関係と複合的に作用するものにもなるが、その前提には「退廃」という逸脱した脆弱な身体の実験がまずあるのである。

結局、19世紀西洋において「私」から「公」へと「伝染」の共同性の拡張があったとすれば、その過程で「退廃」は固有の役割を担ったように思われる。特に「退廃」の身体は、性差に関わらない文脈に脆弱な身体を実定性の台座とする言説が入り込むにあたって重要な意味合いをもっていただろう。「退廃」の言説においては、階級の差異などに依拠しながら非生殖的な性が「公」の空間に開かれていく。その結果、「私」と「公」の境界は越えられ、「伝染」の共同性

はその区分を越えて広がっていくだろう。そして「私」の空間に起点をおく「ヒステリー」が個の身体の根本的な不安を物語るものだとすれば、「退廃」は、その不安が集団へと拡張されたときに生じる不安を物語っている。19世紀末にみられた「ヒステリー」と「退廃」との結合は、個体と集団とが「伝染」の共同性の拡張を介して接続されていったことを示している。ただし集団への拡張があったとしても、それは個体が集団のなかの一要素として位置づけられてしまうということではない。拡張の基盤にあるのが逸脱の再生産としての「伝染」である限り、すべてはまず個の身体の個別性として発現する。従って、集団の全体性の表象、すなわち〈社会〉は、個の身体という部分性のうちに読み込まれてしか立ち現れない。つまり、記号としては全体性を欠いたものとしてしか存立しえない全体性の表象が〈社会〉なのである (19)。
その意味で、〈社会〉もまた〈家族〉と同様に常にすでに“危機”にあるものとして語られる。「群集」という集合的身体のありようは、そのような〈社会〉の表象を現出させる個体と集団の接続のかたち、すなわち逸脱した個の身体の空間的分散にともなう不安を象徴するものに他ならない。

ところで、このような「退廃」と「ヒステリー」の結合が脆弱な身体を実定性の台座とする言説編成の一つの到達点を示すものであるとすれば、それはもう一方でその言説が固有の現実性を失い始めるときでもある。19世紀西洋において、脆弱な身体をめぐる言説は、「私」の空間に基盤をおくときには、抑圧の機制と接続されることで独特の“暗さ”あるいは“重さ”というものを帯びていた。だが、「群集」をめぐる言説に象徴されるように脆弱な身体が「公」の空間に拡散していくことで、それも希薄なも

のようになっていく。そしてそれがすすんで限界を越えれば、この節でみてきた言説編成も変質していくだろう。

そのような現象は、「退廃」や「ヒステリー」という記号そのものが消費の対象となるときに起こるだろう。例えば、世紀末のヨーロッパでまたたくまにベストセラーになった本にマックス・ノルダウの『退廃 degeneration』がある。この本では、ゾラなどの当時流行の文学や絵画が「退廃」を枠組みとした批評の対象になっている。ノルダウの意図は、序文をロンブローゾにささげていることからわかるように、犯罪人類学などに代表される実証主義の方法論を芸術の分野にまで適用しようというものだった。そして賛否両論渦巻くなかで、結果的にこの本は数年のうちに次々と版を重ねることになった(20)。その本の最初のあたりで、ノルダウは次のように言う。

「(…) 医師、特に神経疾患や精神疾患の専門家ならば、「世紀末」の特質、現代の芸術や詩の諸傾向、神秘主義的、象徴主義的、「退廃的」作品の著者の行動や生活、そして流行の趣味や美的性質に対してその賛美者がとる態度のなかに、自分のよく知っている二つのはっきりした病気のかたち、すなわち退廃とヒステリー（それは軽い段階では神経衰弱と呼ばれる）が入り混じっているのを目で見抜くだろう。この二つの身体の状態は異なるものではあるが、多くの特徴を共有しており、しばしば同時に起こる。従って、それぞれを切り離すよりも組合わさったかたちで観察する方が楽なのである。」(Nordau [1895:15-16])

ここでは、「退廃」と「ヒステリー」がやは

り希薄なかたちで重ね合わされている。だがここでは、「退廃」が意識的に分析概念として用いられることで、それ自体が消費されているともいえるだろう。実際、この本は、流行を分析対象としながらもその流行の一部になったのである。その意味で、この本は、19世紀西洋の脆弱な身体を実定性の台座とした言説の半ば外部に出てしまっていると言ってもよいかもしれない(21)。

4. 結 語

ここまで、19世紀西洋の言説空間における「ヒステリー」的身体の射程を検討してきた。われわれが終始強調してきたのは、19世紀西洋においては脆弱な身体、すなわち力の媒体であると同時に視線を引きつける表現としてもある身体が経験の質を規定する位相が存在していたということであり、その代表的な形象の一つとして「ヒステリー」についてみてきたわけである。従って、「ヒステリー」的身体が脆弱な身体すべてであったわけではなく、むしろ他の脆弱な身体を示す形象と多様な連関をもつことで「ヒステリー」は言説空間全般に散布されていくきっかけを得たといったほうがよいだろう。そのことで「ヒステリー」的身体が次第に希薄化し、言説のなかでレトリックとしてしか存在しなくなったとしても、それゆえいたるところで「ヒステリー」が言説生産の起点になる例が19世紀にはみられたのである。そのような「ヒステリー」の発揮する言説喚起作用に注目してJ. バイツァーは、19世紀には「文化のヒステリー化」がみられると主張している。だがわれわれが探ってきたのは、むしろそのような言説に取り込まれ物語の起点となりながらも言

説そのものの不安定をもたらすような身体とはどのようなものかということだった。つまりわれわれは、「ヒステリー」のレトリック化の台座となる脆弱な身体としてのあり方に着目することで、言説の喚起作用にとどまらない「ヒステリー」の意味合いを明らかにしようとしたのである。

そこから一応の結論として得られたのは、19世紀西洋が個の身体の個別性を前景化させる関係性のかたちをつくりだしていたということである。そのようにして形成される身体どうしの作用をここでは「伝染」の共同性と呼んできた。そこでは、個別性が視線の求める対象になることで逸脱がある意味で「常態」になる。そしてその視線の主体も、感受性を共有する限りでその逸脱を自ら模倣するのである。つまり、そのような「伝染」の共同性に基本的に外部はない。従って、それぞれの個の身体は、自己の内部で起こる感情の逸脱に抵抗することはできない。感受性の鋭さゆえに封じ込めることのできない感情の高まりに突発的に襲われるという予感に常に不安を覚えながら、しかしその不安を享受するしかないのである。この「鋭敏な受動性 alert passivity」(G. ビアー)こそが19世紀の言説空間における主体の一つの実質に他ならない。

註

- (1) 18世紀の「ヒステリー」は、「ヒポコンデリー」とともに「感受性」の言説空間のなかに位置づけられていた。「感受性」の言説についてはTodd [1986]、Marshall [1988]、Mullan [1988]が参考になる。また太田 [1996]では、18世紀の「ヒステリー」について考察を試みている。
- (2) フェミニズムの立場からヒステリーに言及した研究は数多く、またアプローチも多様である。だが

いずれにしても男性—女性関係にみられる「支配」を分析対象にしているという点では共通していると考えられる。Showalter [1985=1990]、Evans [1991]、Herndl [1993]など。またヒステリー研究の歴史についてはMicale [1995]を参照。

- (3) 言うまでもなく、このような研究の展開を促したのは、精神分析からの刺激によるところが大きい。ここで本稿と精神分析との関係についてごく簡単にふれておこう。精神分析そのものがその歴史的位置もふくめて多面的なので、精神分析を単純に肯定したり否定したりすることはむろんできない。ただ本稿の関心との関わりでいえるのは、精神分析の成立以前にも「ヒステリー」は独特の意味合いを帯びたものであり、しかもそれは、必ずしも「シャルコーからフロイトへ」という一つの方向へ収斂するものとして経験されてはいなかっただろうということである。従って、以下の考察では、精神分析に対して留保したうえで、それを主題的に扱うことはしない。
- (4) 当然、「伝染」という表現は公衆衛生の言説にも頻出するわけだが、ここでたどるように、それはもっと広範囲で用いられた表現である。単なる科学的言説という面からだけではなく“レトリックとしての「伝染」”という面から19世紀の文化的言説を考察してみる必要があるように思われる。Stallybrass and White [1986=1995]参照。
- (5) このような逸脱における身体の発見は、自己崩壊の欲望まで可能性としてはらむマゾヒズムの一次性というかたちでBersani [1981=1994]などが強調する点である。ここには「セクシュアリティ」の定義をめぐる複雑な問題がからんでおり、本稿と無関係ではないがここでは立ち入らない。
- (6) 実際、この小説に登場する主要な男性は、多かれ少なかれ神経の過敏さを備えた人物として描かれている。また富島 [1993]でもこの場面が論じられている。

- (7) 「センセーション」という表現には、多義的な意味合いがある。それは物語の内容を指すものであり、それを読む読者の身体的反応を指すものであり、さらにはそれが当時の社会に引き起こした反響を指している。Cvetokovich [1992]参照。また「センセーション」が一つの流行になる社会背景についてはAltick [1986=1993]、Harris [1989]を参照。
- (8) 「母親」の表象としての根本的な不安定性、そして「ヒステリー」との関連についてはMatus [1995]が論じている。
- (9) 〈家族〉は、言説戦略のうえでは常にすでに欠如をはらむもの、つまり危機の相にあるものとして表象されるという指摘は、Reid [1993]に負っている。
- (10) 19世紀ヴィクトリア期の小説のなかにあらわれる「病室」場面を検討するBailin [1994]の研究は特に参考になる。また「看護」の理念に内在するジェンダーイデオロギーとその揺れについては、Poovey [1988]が「ナイチンゲール」を対象に論じている。
- (11) リトヴァクは、ブラッドンのこの小説において、演劇性 *theatricality* が規律化に回収されない過剰なものであることを説得的に論じている。
- (12) 「退廃」という記号が19世紀において果たした一連の文化的役割についてはPick [1989]が最も詳しくまた示唆的である。本稿の「退廃」についての記述も多くをその研究に負っている。
- (13) 「娼婦」についての歴史的研究としては、例えばCorbin [1978=1991]やWalkowitz [1980]などが代表的なものとして挙がるだろう。特に「ヒステリー」と「売春」を結び付けて論じたものとしては、Matlock [1994]がある。しかしこれらはみな広い意味で権力関係の分析を目指したものである点で本論の視角とは異なる。
- (14) その照合関係についてはBernheimer [1989:226]を参照。またナナがヒステリーであるという記述はゾラが1878年に作成したルゴン・マッカール家の家系図にみられる。
- (15) 当時の群集心理学の概要を論じた研究としてはGinneken [1992]がある。
- (16) 群集心理学における催眠の意味合いを論じたものに富永 [1986]がある。
- (17) この「接触への情熱」はさらに電気療法の試みや体内からの直接的な卵巣圧迫法の提唱というかたちにもあらわれる。またアメリカでの電気療法についてはGreenway [1987]を参照。
- (18) この点でE. カネッティの群衆における「接触恐怖の転化」の指摘は示唆的である。「伝染」、つまり身体あるいはそれに関わる何ものかに接触することには、単なる嫌悪感だけではなく、根源的な快楽あるいは苦痛をとまなう快楽のようなものがある。もちろん本稿ではそれを歴史的に構成された感情として考えようとしている。それは、視線における距離の保持とその崩壊の問題、つまり視線の「感受性」の問題でもあるだろう。このことについては港 [1991]の第一部の記述が参考になる。
- (19) これは当然、個人と集団の連関という社会学がずっと抱えてきた問題の歴史的系譜というテーマにつながる。そのことをここで詳しく検討することはできないが、一つだけ言えるのは、個人（部分）が集団（全体）に先行するところに19世紀の「社会」の経験のリアリティーが存在したのではないかということである。少なくとも「ヒステリー」という断面からみる限り、個人の逸脱は社会のイデオロギー的矛盾に帰着するというようなことは必ずしも当てはまらないというのが本稿のさしあたりの結論である。
- (20) もともとドイツ語で出版されたこの書物は一大反響を巻き起こし、数年のうちに英語、フランス語に翻訳され、例えばイギリスでは半年のうちに7版を重ねる大成功を収めた。だがそれからまも

なく激しい批判を浴びることになったという
(Greenslade [1994:120])。
(21) このことは、おそらく群集心理学にもあてはま
るだろう。そこでも「暗示」や「模倣」といった

ことが分析概念として取り出される限りで、それ
は他者の経験になっているのである。その意味で
特にタルドの群集論などにはきわめて現代的な観
点を読み取ることが可能だろう。

【参考文献】

- Altick, Richard D. 1986 *Deadly Encounters: Two Victorian Sensations*, Univ. of Pennsylvania Press. =1993 井出弘之訳
『二つの死闘』、国書刊行会
- Bailin, Miriam. 1994 *The Sickroom in Victorian Fiction: The Art of Being Ill*, Cambridge Univ. Press.
- Beer, Gilian. 1983 *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*, ARK
Paperbacks.
- Beizer, Janet. 1994 *Ventriloquized Bodies: Narratives of Hysteria in Nineteenth-Century France*, Cornell Univ. Press.
- Bernheimer, Charles. 1989 *Figures of Ill Repute: Representing Prostitution in Nineteenth-Century France*, Harvard Univ.
Press.
- Bersani, Leo. 1981 'Representation and Its Discontents', in Stephen J. Greenblatt(ed.) *Allegory and Representation*, Johns
Hopkins Univ. Press. =1994 船倉正憲訳 「表象・再現とその不満」、『寓意と表象・再現』所収 法政大
学出版局
- Braddon, Mary Elizabeth. 1863 *Lady Audley's Secret*.
- Brooks, Peter. 1993 *Body Work: Objects of Desire in Modern Narrative*, Harvard Univ. Press.
- Canetti, Elias. 1960 *Masse und Macht*, Classen Verlag. =1971 岩田行一訳 『群衆と権力 上下』、法政大学出版局
- Collins, Wilkie. 1857 *The Dead Secret*.
- 1860 *The Woman in White*. =1978 中西敬一訳 『白衣の女 I II』、国書刊行会
- Corbin, Alain. 1978 *Les filles de nocé: misère sexuelle et prostitution (19^e et 20^e siècles)*, Aubier-Montaigne. =1991 杉村和子
監訳 『娼婦』、藤原書店
- Cvetkovich, Ann. 1992 *Mixed Feelings: Feminism, Mass Culture, and Victorian Sensationalism*, Rutgers Univ. Press.
- Didi-Huberman, Georges. 1982 *Invention de l'hystérie*, Editions Macula =1990 谷川多佳子・和田ゆりえ訳 『アウラ・ヒ
ステリカ』、リプロポート
- Evans, Martha Noel. 1991 *Fits & Starts: A Genealogy of Hysteria in Modern France*, Cornell Univ. Press.
- Foucault, Michel. 1961→1972 *Histoire de la folie à l'âge classique*, Gallimard. =1975 田村俶訳 『狂気の歴史—古典主義
時代における』、新潮社
- 1976 *La volonté de savoir*, Gallimard. =1986 渡辺守章訳 『知への意志』 新潮社
- Ginneken, Jaap van. 1992 *Crowds, Psychology, & Politics, 1871-1899*, Cambridge Univ. Press.
- Greenslade, William. 1994 *Degeneration, Culture and the Novel 1880-1940*, Cambridge Univ. Press.
- Greenway, John L. 1987 "'Nervous Disease" and Electric Medicine' in *Pseudo-Science and Society in Nineteenth-
Century America*, Arthur Wrobel(ed.), The Univ. Press of Kentucky.

- Harris, Ruth. 1989 *Murders and Madness: Medicine, Law, and Society in the fin de siècle*, Oxford Univ. Press.
- Hemdl, Diane Price. 1993 *Invalid Women: Figuring Feminine Illness in American Fiction and Culture, 1840-1940*, The Univ. of North Carolina Press.
- Kahane, Claire. 1995 *Passions of the Voice: Hysteria, Narrative, and the Figure of the Speaking Woman, 1850-1915*, The Johns Hopkins Univ. Press.
- Le Bon, Gustave. 1895 *Psychologie des foules* =1993 桜井成夫訳 『群衆心理』、講談社学術文庫
- Matlock, Jann. 1994 *Scenes of Seduction: Prostitution, Hysteria, and Reading Difference in Nineteenth-Century France*, Columbia Univ. Press.
- Matus, Jill A. 1995 *Unstable Bodies: Victorian Representations of Sexuality and Maternity*, Manchester Univ. Press.
- Marshall, David. 1988 *The Surprising Effects of Sympathy: Marivaux, Diderot, Rousseau, and Mary Shelley*, The Univ. of Chicago Press.
- Micale, Mark S. 1995 *Approaching Hysteria: Disease and Its Interpretations*, Princeton Univ. Press.
- Miller, D.A. 1988 *The Novel and the Police*, Univ. of California Press. =1996 村山敏勝訳 『小説と警察』、国文社
港千尋 1991 『群衆論-20世紀ピクチャーセオリー』、リプロポート
- Mullan, John. 1988 *Sentiment and Sociability: The Language of Feeling in the Eighteenth Century*, Oxford Univ. Press.
- Nordau, Max. 1895 *Degeneration*.
- 太田省一 1996 「感受性としての身体：文化としての〈ヒステリー〉1」、和洋女子大学紀要（文系編）
- Pick, Daniel. 1989 *Faces of Degeneration: A European Disorder, c.1848-c.1918*, Cambridge Univ. Press.
- Poovey, Mary. 1988 *Uneven Developments: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England*, The Univ. of Chicago Press.
- Reid, Roddey. 1993 *Families in Jeopardy: Regulating the Social Body, 1750-1910*, Stanford Univ. Press.
- Ritvak, Joseph. 1992 *Caught in the Act: Theatricality in the Nineteenth-Century English Novel*, Univ. of California Press.
- Rose, Nikolas. 1985 *The Psychological Complex: Psychology, Politics and Society in England 1869-1939*, Routledge & Kegan Paul.
- Showalter, Elaine. 1985 *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830-1980*, Pantheon. =1990 山田晴子
ほか訳 『心を病む女たち-狂気と英国文化-』、朝日出版社
- Stallybrass, Peter and Allon White. 1986 *The Politics and Poetics of Transgression*, Methuen =1995 本橋哲也訳 『境界侵犯-その詩学と政治学』、ありな書房
- Tarde, Gabriel. 1901 *L'opinion et la foule*. =1964 稲葉三千男訳 『世論と群衆』、未来社
- Todd, Janet. 1986 *Sensibility: An Introduction*, Methuen.
- 富永茂樹 1986 「催眠と模倣-群衆論の地平で」、『思想』750号
- 富島美子 1993 『女がうつる-ヒステリー仕掛けの文学論』、勁草書房
- Vincent-Buffault, Anne. 1986 *Histoire des larmes XVIIIe-XIXe siècles*, Rivages =1994 持田明子訳 『涙の歴史』、藤原書店
- Vrettos, Athena. 1995 *Somatic Fictions: Imagining Illness in Victorian Culture*, Stanford Univ. Press.
- Walkowitz, Judith R. 1980 *Prostitution and Victorian Society: Women, Class and the State*, Cambridge Univ. Press.
- Wood, Mrs. Henry. 1861 *East Lynne*.

(おおた しょういち)

◎哲学／反哲学
◎現代思想
◎社会学

理論社会学、比較社会学、社会システム論、社会情報学、情報理論、メディア論、文化社会学、カルチャー・マテリアリズム、メディア・アクティビズム、自己組織化（自己組織性）、可能世界論、数理社会学、ゲーム理論、社会的選択理論、言語哲学、分析哲学、法哲学、応用倫理学、構造主義／ポスト構造主義、現象学（現象学的社会学）、エスノメソロジー、社会学の古典、ルーマン、フーコー、ヴァイトゲンシュタイン、文化人類学、民俗学、宗教学、東洋思想、数学、その他社会学周辺。

◎サブカルチャー◎カウンターカルチャー
◎まんが◎幻想文学◎芸術書

Wonderland そして/または資料集蔵体
古スコブル社
本3332-3056 [TEL&FAX]
東京都杉並区西荻南 2-19-5 (〒167)

住所・氏名・電話(FAX)・E-mailアドレス等、お知らせ下さい。

弊社取り扱い書籍・文献・資料等の目録を発行予定。ご希望の方は、

(紀伊國屋書店発行／非売品)等に掲載のものは高く買います。

洋書につきましては、社会学分野洋書カタログ『ソシオ・バック5001』
等で採り上げられる文献は高く買います。(まんがも)

ソシオログス誌上や、社会科学者のための古典研究会・言語研究会
等で採り上げられる文献は高く買います。

あなたの本、高く買います。

価値。

and/or

